

「子どもの貧困対策センターあすのば」を設立した

顔



撮影・稲垣政則

おがわ 小河 光治さん 50

貧困に苦しむ子供の支援や実態調査を行い、政策を提言する団体を6月19日、東京で設立した。「携われるのは天命」。国の調査で6人に1人が貧困とさ

れる現状を前に、使命感に燃え8歳の誕生日、父が交通事故に遭い、7年間の寝たきり生活の末に逝った。治療費返済のため、母は働き続けた。

「死のうか」と母に言われ、「何でこんな目に」と幼心に泣いた。

救いは遺児対象の奨学金だった。その支えで高校、大学へと進み、「一人じゃない」と実感した。だから、「苦しむ子を温かく包み、周囲を幸せにする大人に育てような、おせっかいな社会を作りたい」と、就学支援金の支給なども目指す。

遺児支援団体「あしなが育英会」に勤務し、阪神大震災を機に生まれたケア施設「神戸レインボーハウス」の館長として、内面に葛藤を抱える遺児たちに寄り添ってきた。育英会の奨学生たちとは、貧困家庭の子供が成長後、自らも貧困に陥る「貧困の連鎖」を断ち切る運動を展開。一昨年、「子どもの貧困対策法」の成立につながった。今春退職して挑む新たな道。「人生をかける」。迷いはない。

(大阪社会部 黒川絵理)

全国のひとり親家庭の支援者や母子家庭で育った若者たちが、子どもの貧困対策に取り組む一般財団法人「あすのば」(東京)を設立した。経済的に困窮する家庭の実態調査と政策提言のほか、入学準備金支給など子どもを直接支援する。中心メンバーは、遺児支援をする「あしなが育英会」の元職員小河光治さん(50)や、夜を一人で過ごす子どもの居場所づくりに取り組むNPO法人「山科醍醐子どものひろば」(京都市)の村井稼哉理事長(34)ら6人。このうち3人は、母子家庭や児童養護施設出身の大学生

「子どもの貧困」政策提言

母子家庭の若者たち 対策へ財団法人設立

だ。「子どもがセンター・とまんなか」を合言葉に、学生が運営にかかわり、政策提言に子どもの声を反映させる。4月末に設立準備会が発足し、賛同人は846人。創設寄付には全国から1100万円以上が集まった。小河さんは「子どもの貧困対策は国がやるべきだ」という意見もあるが、地域で大人ができることはたくさんあり、大切に広げる必要がある。ひとごとではなく、みんなに私たちの問題と想ってもらえるようにしたい」と話す。

問い合わせは電話(050・3740・2886)やメール(info@usnova.org)のホームページhttp://www.usnova.org/ (中塚久美子)

子どもの貧困撲滅 支援センター設立

経済的に困窮する家庭の子どもを支援する一般財団法人「子どもの貧困対策センター『あすのば』」が19日設立された。理事に就任した宮本みち子・放送大副学長(社会学)は東京都内での記者会見で、

「貧困に苦しむ子どもにはネグレクト(親の子育て放棄)や不登校など社会的孤立が同時に生じている」と、センターの必要性を訴えた。日本では子どもの6人に1人が貧困状態にあるとされ、同センターは実態調査や政策提言のほか、入学準備金支給など直接支援にも取り組む。代表は元あしなが育英会職員の小河光治氏が務め、母子家庭や児童養護施設で育った学生3人も参加する。【山田麻未】



子供の貧困対策の必要性を語る村尾政樹さん 東京都千代田区で19日午後7時33分

「今度は支える側に」

センターの専従スタッフになる村尾政樹さん(24)も父子家庭で育ち、アルバイトや奨学金で大学に進んだ。センターは高校時代からの志をとげる場所。「自分と同じ境遇の子どもの力になりたい」と語る。小6の時、母は精神的な

母亡くし奨学金で進学 専従スタッフに

病を抱えて自死した。その1週間前、2人で祭りに行った時に「写真を撮ろう」という母の誘いを断っていた。どうしてあんなことを言ったのか、と苦しんだ。仕事に追われる父に3人の子育ての余力はなく、小1の弟は姉や自分と別れ児童養護施設に行った。

に、仲間の言葉に打ちのめされた。母子家庭という高校3年生は言った。「私は進学できないから最初で最後のキャンプになります」北海道大に進む。入学金などはバイトの貯金を充てた。入学して自死遺児学生らが集う団体を設立。卒業し子どもを支援する札幌市の団体に働いていた時、センターに誘われた。高校時代、バイト先の居酒屋の店長が「私も若いころ母を亡くしたから」と親切にしてくれた。いろいろな人に助けられ、支える側になった。そんな生き方を広げたい。「誰もが幸せな人生を歩めるようにする。それが子どもの貧困対策です」【山田麻未、写真も】

NHK NEWSWEB

子どもの貧困実態調査へ団体発足 6月20日4時42分

経済的に困窮する子どもの問題が深刻になるなか、NPOなどが子どもの貧困の実態を調査するための新たな団体を立ち上げ、今後、対策や支援の在り方を国に提言することになっています。

新たに発足した団体「子どもの貧困対策センター あすのば」は、ひとり親の家庭を支援しているNPOや、経済的に厳しい環境で育った大学生などが中心になって立ち上げました。

19日夜に東京・千代田区で記念の集会が開かれ、この中で、ひとり親の家庭で育った女子大学生が意見を述べて、「経済的な理由で進学を断念する子どもも少なくありません。生まれた環境によって、子どもの将来が左右されるべきではないと思います」と訴えました。

厚生労働省によりますと、17歳以下で貧困の状態にあるとされる子どもの割合は、平成24年には推計で16.3%と6人に1人に上り、大きな社会問題になっています。

こうした事態を受けて、おとし、子どもの貧困対策を自治体などに義務づける法律が成立しましたが、「子どもの貧困対策センター あすのば」は、「対策はまだ十分とは言えない」として、今後、子どもの生活実態の調査などを行って貧困の実態を明らかにしたうえで、対策や支援の在り方を提言したいとしています。

センターの代表、小河光治さんは「自分たちの問題として社会全体で考えてもらえるよう活動していきたい」と話しています。

都市より少ない未来の選択肢

地方の子ども 貧困から救う

貧困に直面する子どもへの支援や政策提言に取り組むため、6月に設立された一般財団法人「あすのば」(東京都港区)の専従スタッフに、神戸市灘区出身の村尾政樹さん(24)が就いた。北海道で働いた経験から「地方の子どもたちは、都市部よりさらに進学などの選択肢が限られる」と実感。「地方の視点」を重視し、貧困対策に取り組む。

(磯辺康子)

神戸出身村尾さん 支援財団スタッフに

村尾さんが子どもを借りていた民間団体と神戸市立神港高校情援に取り組み背景に「あしなが育英会」(本報処理科に進んでいた)は、自身の経験がある。部・東京の集いに参加、大学進学を決意。神戸で両親、姉、弟と加したことが、アルバイトと奨学金で暮らしていた小学6年「親を亡くした高校」のとき、母が自殺。精神がこんなに多いのとき、母が自殺。精神的な病を抱えていたか、と驚くと同時に、母に冷たい態度で接し、進学を断念せざるを得ないことを後悔し、自責の念に駆られた。転機になったのは高1年のとき、奨学金に職を付けて就職を

母の自死、過疎地の活動経験



や市民の連携組織をつくり、子どもの貧困をめぐる学習会も開いた。卒業後は道内の団法で働いていたが、6月、あしなが育英会・神戸レインボーハウス(神戸市)の元館長小川光治さん(50)らと「あすのば」を設立。小川さんが代表理事、村尾さんが唯一の専従スタッフとなった。子どもの貧困をめぐると、子どもの6人に1人が貧困状態にあるとき、2年前に設立した「あすのば」が、6月、あしなが育英会・神戸レインボーハウス(神戸市)の元館長小川光治さん(50)らと「あすのば」を設立。小川さんが代表理事、村尾さんが唯一の専従スタッフとなった。

子どもの貧困対策を進める一般財団法人「あすのば」の専従スタッフとなった村尾政樹さん=神戸市中央区(撮影:後藤亮平)

子どもの貧困対策センター「あすのば」の代表理事

おがわ こうじ 小川 光治 さん(50)



貧困に苦しんでいる子どもたちを支えたい。こう願う原点に、自身の経験がある。

8歳の誕生日、父が自宅前で車にはねられ、意識不明になった。重い医療費負担に追い詰められ、母は「ガス栓をひねるしかない」と一家心中を口にした。声を押し殺して泣いた記憶がある。約7年の闘病生活の末、父は逝った。

愛知県小牧市の出身。奨学金を得て大学に進学。災害遺児を支える活動に力を注ぎ、卒業後はあしなが育英会へ。2006年から4年間は、同会が運営する阪神大震災の遺児らの支援施設「神戸レインボーハウス」の館長を務めた。

子どもの貧困に関心を持ちはじめたのは、あしなが育英会の奨学金で大学進学した遺児らとの問題に取り組んだのがきっかけだ。離婚で生活が苦しくなった家庭もある。低賃金の非正規雇用の親が増え、遺児だけではなく、多くの子が貧困にあえいでいる。

「救われた子が救われていない子」を救う『恩送り』の運動です。「あすのば」は東京で大学生らと6月に設立した一般財団法人。明日の場、貧困は私たち(us)の問題との意味を込めた。貧困の実態調査や政策提言に取り組む。「苦しみ強い子ほど、助けて救いの声を出せない。それはわたしの経験からもよくわかっています。真っ暗闇のトンネルに閉じ込められた子に光を当てたい」

文・写真 瀬戸口和秀

子どもの貧困対策センター準備会代表 おがわ こうじ 小川 光治 さん(50)



子どもの貧困問題に取り組む人たちが6月に設立する団体の代表に就く。26年勤めた遺児支援の「あしなが育英会」を3月で退職。国が対策強化を打ち出す今、「現場で実践されている取り組みを基に、支援のあり方を国に提言する団体が必要」と感じ、新たなスタートを切った。

子どもの貧困対策法の制定を求める活動で、比較的支援が充実している遺児たちより、もっと光の当たらない子どもたちがいると感じた。離婚などによるひとり親家庭や非正規雇用で低収入など貧困の背景は多様だ。「どんな家庭に生まれても、自分の足で人生を歩けるよう支えたい」

8歳の誕生日、父が交通事故に遭った。7年後に亡くなるまで寝たきりで、家庭は困窮。「なんでこんな目に」と人知れず泣いた。会設立を発表した日は50歳の誕生日。父を亡くしたいきさつに触れた時、思わず涙が込み上げた。幼少時に深く傷付いても前を向けたのは、寄付でまかな

この人

われるあしながの奨学金で進学できたからだ。「自分のことを大切に思ってくれる大人がいる。その喜びを子どもたちに感じてほしい」。多くの大人たちに、関心を持ってほしいと願う。(小林由比)